

電気電子工学科

（この点検項目は、大学基準協会から、前回の「改善報告書の検討結果」により「理工学部電気電子工学科の収容定員に対する在籍学生数の比率について、1.32と高いので改善すること」について再度報告を求められている事項である。）

以下の表は、「１．収容定員に対する在籍学生数比率」と「２．入学定員に対する入学学生数比率」を1999～2006年度について示したものである。

１．収容定員に対する在籍学生数比率

(各年度とも５月１日現在)
※小数点以下第３位を切り捨て

年度	１年		２年		３年		４年		在籍者数	収容定員数	在籍者合計 ※	４年間ごとの
	在籍者数	収容定数	在籍者数	収容定数	在籍者数	収容定数	在籍者数	収容定数	合計	合計	／収容定員数	平均値
1999	141	110	119	110	126	110	155	110	541	440	1.22	1.27
2000	161	109	129	110	119	110	149	110	558	439	1.27	
2001	144	108	148	109	129	110	143	110	564	437	1.29	
2002	129	107	129	108	146	109	173	110	577	434	1.32	
2003	132	106	123	107	128	108	183	109	566	430	1.31	1.23
2004	114	105	134	106	119	107	186	108	553	426	1.29	
2005	106	105	113	105	130	106	158	107	507	423	1.19	
2006	106	105	104	105	139	105	137	106	486	421	1.15	

２．入学定員に対する入学学生数比率

年度	入学者数	入学定員	入学者数 ※ ／入学定員	４年間ごと※ の平均値
1999	130	110	1.18	1.22
2000	154	109	1.41	
2001	132	108	1.22	
2002	118	107	1.10	
2003	130	106	1.22	1.07
2004	114	105	1.08	
2005	106	105	1.00	
2006	106	105	1.00	

表に示されるように、在籍学生数の収容定員数に対する比率は、2002年度までは1.22倍から1.32倍と増加の傾向にあった。これは大学基準協会から指摘を受けた点である。これに対処すべく、本学科では2002年度に原因の分析を行った。その結果、**超過の要因は、１）一般入学試験による入学者の定員超過、２）第４年次生の留年の２点であることが明らかとなった。**

定員超過の第１の原因は入学制度にある。「大学基礎データ」表15に示すように、本学科への入学者の多くは、一般入試により入学している。一般入試では、合格発表者と実際に入学手続きをする者の比率が年ごとに大きく変化する。このため、一般に公表した募集人数分の入学手続き者を確保しようとすると、超過の危険を承知で多めに合格者を発表せざるをえない。この結果、入学者数が定員を10～20%程度超過する結果を生むことになってしまう。この他、卒業前に退学する人数を考慮して入学定員の５%増程度の手続き者を目標に合格者を発表することを要請されることにも原因があると思われる。また、合格者の授業料延納制度も大きな問題である。延納の期限が３月末に設定されているため、次年度開始ぎりぎりまで入学者の実数が把握できない。さらに、入学辞退者の入学金等の返還が認めら

れるようになったため、さらに入学者数の推定が難しくなっている。

以上の状況に対処するため、**2003年度以降は入学者が定員を大きく超過することを防止するために、合格発表者数を少なくすることに努めた。**入学手続者が予定数に満たない場合には、補欠入学者を募集し、調整している。この効果は「大学基礎データ」表13に示されるように、2004年度頃から表れている。しかし、この方法は人数合わせの方法としては有効であるが、補欠発表の回数が増えると入学者の学力レベルが低下し、入学後の教育に支障を来すことも予想される。この点を反省し、現在では補欠発表を極力減らす方向で検討を行い、実施している。

また、推薦入学の場合には合格者全員が入学し、しかも留年も少ない。したがって、推薦入学者の割合を多くすることにより定員超過を改善できるものと予想される。定員超過の問題の解決と、優秀な学生の確保の観点から、2002年度から推薦入学者数の増加の検討を行い、推薦制度を見直して推薦条件の評定平均を緩和するとともに、推薦依頼を行う高校を見直しして、2003年度からは推薦依頼校の数を増やし、2005年度にはさらに増加させた。また高等部からの併設校推薦入学者は入学後の成績が良好な者が多く、しかも推薦された者が確実に入学する。この推薦入学者数を増加させる方途も現在検討中である。

上記募集方法の変更により、1年次入学者数の定員超過の問題は、2000年度には定員の1.41倍であったものが、2003年度1.22倍、2004年度には1.08倍、2005年度からは1.0倍と大幅に改善されている。

定員超過の第2の原因は、収容定員数の15.7%（在籍学生数の13.6%）を占めている留年生、とくに第4年次の留年生（4年次生の約30%）にある（「大学基礎データ」表14）。これは、本学科では4年次になるまでの進級に条件がないため、多数の成績不良者が4年次生として留年することになるからである。留年する原因は種々あるが、主として趣味やアルバイト等に時間を費やし、勉学が疎かになったケースが多く見受けられる。これら学生のほとんどが下級年次において必修基幹専門科目の単位を取得できていない。このため、2003年度のキャンパス移転の際に**2年次に集中していた必修科目を分散**するため、2年次配置の「電気磁気Ⅰ及び演習」を1年次後期に移動して配置した。また、教育補助員の人数も従来よりも若干増加させるとともに、**助手や教育補助員が指導を補うことにより、2、3年次における必修科目の指導を強化し、再履修の機会も増やして**4年次における留年生の減少を図っている。幸いにも4年次生は既にかんりの単位を取得しており、一般に4年次の履修単位数は少ないので4年次の授業の受講者を増大させる等の支障は発生していないが、今後は、さらに教育補助員を増やすことにより指導を強化したい。

4年次の在籍学生数は、2003年度は収容定員数の1.68倍であったが、2006年度には1.29倍と減少した。これは、1、2年次の学生に対する学習指導の強化策によって、2年次までに必修科目の単位を取得する学生数が増加したため、留年生の数が減少傾向にあるためと考えられる。4年次の在籍学生数の定員超過の問題も徐々に改善されているが、4年次留年生は2006年度においても38名と未だ多い。最近の入学者の学力が徐々に低下しており、これが留年生を増加させる新しい要因となっていると考えられる。今後は学生の授業理解度をより深めるため、授業科目に演習を多く取り入れることによって留年生の減少を図ることを考えている。

以上2つの問題点について上記の対策により、在籍学生数の収容定員数に対する比率は、2002年度の1.32倍をピークとして以後減少の傾向を示し、2006年度では1.15倍となり、大幅に改善された（「大学基礎データ」表14）。10～20%程度の定員超過は止むを得ないが、それによる授業の効率の低下、また、実験科目では設備の不足を生じる場合もある。授業を適切に行うためにも適正な入学者を迎えることが望ましい。現在の本学科の定員管理は適正なものと考えており、組織改組、定員変更等の措置をとる必要はないと考える。

本章 III. 各学部・研究科の取組

また「大学基礎データ」表17に示されるように、毎年10名前後の退学者が出ている。1年次生の退学理由のほとんどは他大学への進学等の進路変更であり、2～3年次生の退学理由は進路変更、取得単位僅少による成業の達成困難などである。**退学理由は学生部委員によって学部教授会で開示されており、単位僅少者に対しては個別面談等の指導を行い対応している。**